

Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.68

試 行 錯 誤



ロバ車で水を配る
(佐久間典子写真集より)

特集 ソマリアで何を見たか

座談会 ソマリアで何を見たか	2
明日への選択	8
補助給食はだれが食べるの	10
JVC農場の風車と水車	12
マーシャ村通信 続 女の仕事について	14
東金に農場を作ります	16
山賀さんの思い出 月明かりの群舞	18
タイの仲間たち	19
My Dear Friend	20

ソマリアで何を見たか

鴫田三芳 石井弘代 山口誠史 ききて T/E編集部



やっぱりソマリアっておもしろい

— まずソマリアに行った時の第一印象と帰ってきてからの感想について聞かせて下さい。

鴫田 はじめはソマリアっておもしろい、ソマリア人っておもしろいなんて思ってたんだけど、半年ぐらいくると彼らとつきあうのがしんどくなってきた。でも帰るころには農民の人たちとも親しくなって、最初に行った時と違う意味でおもしろい、また行ってみたいという気になった。

石井 行ったばかりのころは、ソマリアは気候も違うし、すごく開放的だし、明るくて楽しかった。とにかく見るもの聞くものが新しくて。それが1カ月、2カ月経つとソマリア人がわからなくなってきて、何を考えているんだろう、根本的に考え方が違うんじゃないかと行きづまってしまった。それが5～6カ月目ぐらいくらいから何となくおもしろくなって、帰るころはもっといっしょにやっていきたいと思うようになった。

山口 僕はほかの人たちと違って、最初は

首都のモガディシュで仕事をしていましたよ。数字を見たり帳簿を合わせたり。だから人と接することもあまりなく、ショックもあまりなかった。でも後半になって現場に入った時は、やっぱりその違う面に圧倒される場所があった。でも仕事の内容（植林）が自然を相手にするところが強かったので、自然というものに非常に影響を受けたというか、そこで生きる人たちと極限の自然との闘いを学んできたというのが感想かなあ。

— 最初はカルチャーショックを受けて、ある時期からおもしろくなった、興味がわいてきたんですね。それには何かきっかけがあったのですか。

鴫田 僕は常にソマリア人と接していたから彼らとの葛藤はいつもあったんだけど、ある時思いきってけんかしちゃったのね。そうしたら驚いたことに、彼が急に泣き出しちゃって、僕の部屋でオイオイ泣くわけ。「どうしたんだ」と聞いたら、「オレたちソ

マリア人スタッフは日本人スタッフの奴隷じゃない」っていうんだ。それまで彼らと一っしょに働いている形をとっていたけど、物事の決定などに日本人が前に出ているような気はしていたんだ。突然日本人スタッフへの不満が僕にドーンと来てね。それがきっかけで言いたいことをボンボン言うようになった。それからだよ、ソマリアがおもしろく思えてきたのは。

それまでは表面的なつきあいというのか、プロジェクトの運行にばかり気をとられていて、その基本となるその人や、働く仲間とのつながりがなかったんだね。もちろんそれはお互いに相手にくいこんでいくし楽じゃないけど、その時からおもしろいと思った。

石井 変わったというきっかけはあるんです。補助給食に突然誰も来なくなった時があったの。驚いて聞いたらボイコットなのね。「JVCの食事はまずいからおいしくしてくれ」って。その時はものすごいショックだったんだけど、セクションリーダーと話し合っているうちにわかりかけてきて。彼らに対して“してあげている”という気持ちだったからあんなに驚いたんだなと。

補助給食ではこんなこともありました。息も絶え絶えの子供をお母さんたちが連れてくるんだけど、お母さんの方が給食を食べちゃうのね。その時母親には愛情がないのかと思った。母親とは自分が死にかけていても子供には食べ物を与えるべきだと思いでいたのね。だから彼らがわからない、わからないって。

でもひとり栄養状態のものすごく悪い子がいてね、お母さんが献身的につくしたのに死んでしまった。ところがそのお母さん

は涙も流さず、たんとと毎日の仕事をしている。その時表現方法は違うけど、子供への愛情は変わっていなかったんだと思った。そんなことがあってからずいぶん気持ちが楽になった。

やっぱりこちらが力んでいる時は相手に受け入れてもらえない。難民移送の時に一っしょにやっていたスタッフもどんどんいなくなって、ほんとに困ったの。それで思いついて難民の人に相談したら、奥さんと子供はジャボレに行かすけど自分はJVCの活動が終わるまで一っしょにやるといつてくれた。それまで私がやらなくちゃと思っていたけど、力を抜いてこちらが助けを求めたら心を開いてくれた。そんな感じがします。

— 山口さんは数カ月間しか現場にいなかったのですが、その間に今の鶴田さんや石井さんのような経験をしたのですね。

山口 僕は首都で事務をしていましたから何かフラストレーションがたまって自分でも解決できるわけです。仕事に打ちこんだり、もちろん当たり散らすということもあったけれど、摩擦もなくできました。

でも現場に入った時は大変で、人と接しなくちゃいけないし。それまで事務仕事をしてきたから、最初のころはくわを持って2～3分もすると手やからだ痛くなる。

でも僕が一っしょに働かないと納得しないし、というところで最初は形だけだったんだけど、現場の人と同じように働こうと腹を決めた時「やってるな」って充実感がありました。だからまだ現場でフラストレーションがたまるまではいなかったのだけれど、僕としては現場に入れて非常にうれしかった。



石井弘代

(いしい ひろよ)
1985・4～86・11までソマリア、ルークのマグドール・キャンプで補助給食、医療活動に従事。

ソマリア病

— 山口さんは1年前に帰ってきたときよりもずっと晴れ晴れしていますね。

山口 それはあるかもしれない。モガディシウのつきあいはきまりきっていて、問題があっても内部にこもってしまう。それがみんなと仕事を分かちあいながら自然の中で働いたというのは、自分の中ですごい解

放感だったんですね。

石井 山口さんが丸くなったってよくいわれるけど、山口さんはもともと自分と合わない人と話をする人ではなかったのね。それがルークに来て自分の弱さを知ってからかな、みんなにいろいろ気を使って話し合う努力をしてくれたのは。ソマリアに来た

人はみんなまず自分の弱さ、えげつなさを自覚して、そこからはい上っていったんだと思う。どの人もね。

自分の弱さを知った時、はじめはソマリア病になるのね。イライラして。もっと自分はよかったはずなのにってあたり散らすわけ。難民さえもけむたく見えて、子供が石を投げてくると、あっちへ行けて。それが難民の人と接する中で少しずつ解決していった。

— ソマリア病には全員かかるの

石井 自分が落ちついた時はほかの人が見えるでしょう。看護婦として見ていたら、期間の長いか短いかはあるけど全員がなっている。

鶴田 自分より周りの者が気づくな。自分では落ちこんだぐらいにしか思っていないけれど、周りの者は「あいつ、おかしいよ」って気づくらしいよ。

石井 ソマリア病の一番の特徴は、おこりっぽくなって、何を言われても受け入れられなくなるの。「うるさーい」って。日本にいる人には、なんでそんなに追いつめられるのかわからないだろうけど。

鶴田 四六時中同じ人と顔を合わせているでしょ。極端にいえば、生活そのものが、生きていること自体が活動だし、逃げ場がないんだよな。

山口 現場だとプライベートな時間は全く

なくて、いやでもみんなと顔を合わせなくちゃいけない。気の合わない人がいると、どうして自分が溶けこめないのかって、自分自身がつきつけられてしまう。

石井 1日中いっしょにいることが原因だとしたら、同じ状況だと日本でもソマリア病っておこると思う？

山口 ソマリアだと日本人が10~15人いて周りは違う世界でしょ。ソマリア社会との軋轢があって、外で気分転換もできない。でも日本ならいくら1日中暮らしても外は解放された社会だし、ソマリア病はおこらないと思う。

鶴田 僕は日本人同士よりソマリア社会を理解するのに苦労した。いつも周りから、「あれをくれ、これをくれ」とね。

石井 私もそう。ソマリア人と解りあえなくて、「私たちは隔離された日本人村だね」って行ってたんだけど。ちょっとお茶を飲みに行くこともできない。そういう中で緑のない世界でしょ。ただ暑くて。そうなる時、せめておいしいものを食べたいんだけど、その時にラクダの肉になるわけ。食事は楽しみのはずなのに、ただ体力保持のために食べるだけ。だからもうかまないし、おなががいっぱいなのに精神的な満足は得られない。だからソマリア人との違い、暑さが重なって悪い方になったときにソマリア病になるんだと思う。

ソマリア文化とは



— 今、食事の話が出ましたが、ふだんはどんなメニューですか。

石井 朝はアンジェラといって、一晩ねかせて酸っぱくさせた小麦粉を焼いて食べる。それとお茶。アンジェラの酸味が日本人にはなかなか合わなくて、小麦粉を溶いてすぐ焼いてといってもなかなかソマリア人は変えてくれないの。「もう食べなくてもい

いや」って朝はお茶だけ飲んでいくのね。それで2時半のお昼までもたす。

お昼はスパゲティにラクダの肉とトマトスープみたいなものを味つけて、それをかける。夜はそれがごはんにかわるだけ。

鶴田 食事も1つの文化だけど、カルチャーギャップというのかな。それが常にあってね。たとえば油だけど、彼らはリッチだと思っている。何にでもいっぱい使う。アンジェラにもドロッとかけるし。それがぜいたくなんだ。僕なんかあんな暑い所で油っぽいもの食えないんだけど。それと砂糖もよくとっているね。

石井 それらはぜいたくだということもあ

るけど、ソマリアでは油とお砂糖しかエネルギー源がないの。ラクダの肉も難民の人にはいつも食べられるわけじゃないし。だから意図的にではなくても、それらによって元気が出るんじゃないかとわかっているんじゃないかな。

鴫田 味のことでおもしろいと思ったのは、ソマリアでは甘いとしょっぱいの2つしかないの。これが基本なんだ。環境もシンプルだし。文化なんて環境によって規定されることが多いんだよね。日本が複雑すぎるのかな、なんて思ったりするけど。

— 前にソマリアに行っていた柴田君が、「ソマリアの文化は口の中にある」と言って

いましたけど、やはり議論好きですか。

山口 みんなしゃべるのはとてもうまいよ。雄弁というか、ごく普通のおじさんが1時間も2時間も物語っちゃうわけ。自分たちの住んでいた場所のこととか先祖とか。そして抽象的な話も得意みたいだな。

鴫田 議論も好きだね。農場で農民とミーティングを開くんだけど、鉄則は“朝から始めるな”。朝7時半ごろ僕は農場に着くんだけど、朝から議論を始めると1日中それで終わっちゃう。かなわないよ。だからミーティングは10時か11時のお茶の時間の前にやる。彼らが唯一ミーティングをやめるのは、腹が減った時ぐらいだからね。



山口誠史

(やまぐち まさし)
1985・3～86・7まで
モガディシュのJVC
事務所まで会計を担当。
1986・7～12まではル
ークで植林を行う。

変わりゆく社会

— 女の人でも議論に加わるんですか。

石井 女の方は話すというより、とにかくよく働く。

鴫田 関心があってもなかなかミーティングには入ってこない。ただ自分が聞きたいなと思った時は話してる外で聞いている。

石井 だからパーティでもパッと見回すでしょ。女は私だけなのね。私は違う社会の人間だからなのかもしれないけど、ふつう女の方は男の人の中に入っていない。

鴫田 ただモハメッド・アデンの奥さんはパーティに来たことがある。あの夫婦は今までのソマリア人夫婦とは違うね。ヨーロッパから人が入ってくるし、その影響があるのかもしれないけれど。

— イスラムは一夫多妻といわれますが、実情はどうですか。

石井 伝統的にはそうなんだけど、モハメッド・アデンのように若者たちの考えが変わってきていることも事実。でも結婚は親が決める。親の決めた人はいいい人ってみんな思っているみたい。

鴫田 僕が聞いた話によると、親が決めた人では「こんなはずではなかった」といって次の人を見つけるらしいよ。

石井 日本だとお金がなくても2人で暮そうと思えばできるじゃない。でも2人目、3人目の奥さんを娶ろうとしたら、お金とか家畜が必要だし、裕福でないといくら好

きでも結婚できない。

鴫田 そう、経済的にバックボーンがないとだめ。2番目の妻ができて1番目の妻は離婚せずずっと経済的に援助をしていくからね。

山口 結婚するってことは彼らにとって大変なことなんだよ。JVCのワーカーでも結婚するから金貸してくれとか、貧しいからまだ結婚できないって言ってるもの。

鴫田 何人も奥さんがいる人に聞いてみたんだ。「同時に全部の奥さん愛せるのか」って。彼は「できるだけ平等に愛すのに神経を使う」って言ってたよ。そういう努力はしているらしいけど。

— 女の方は何も言わないんですか。

石井 女の人同士はけっこう仲良くやってくる。こういうものだと割り切ってるんじゃないかな。

鴫田 彼女たちはこういう社会慣習を決して悪いとは言わないけど、「いやだ」とは言っているね。それが自然じゃないのかなあ。モハメッド・アデンは初めから意識の一致した奥さんと結婚して、2人目はいらないうちでいっている。女性の割礼に反対しているのも彼らのように1対1の夫婦関係を持っているグループだね。大半は女性の割礼を残そうとしているけど、少しずつソマリアの社会も変わっていったと思う。

山口 やっぱりいなかと比べるとモガディ



鷗田三好

(ときた みよし)

1985・11～86・10 マガネイ・キャンプの農場でフィールド・コーディネーターに従事。現在は東京事務所スタッフ。

シユではそういう風習はなくなりつつあるな。敬虔なイスラム教徒であっても、ラマダン（断食）中にけっこう食べたり飲んだりしている。

鷗田 たしかに中央と地方では違う。いな

楽しみは星を見ること

— それでは皆さんの余暇はどのようにして過ごしていますか。

山口 あまり外に出る気もないし、基本的には自分の部屋で本を読んでる。車で街に行くこともあるけど、行ったって唯一の楽しみである冷たいジュースを飲むぐらいだし。あとは、たまにピクニックに行ったか。

鷗田 ルークの近くにちょっとした滝があってね。滝つぼがあるんだ。

石井 それがお風呂がわり。みんな石けんとシャンプーを持って行って、つかってくるのが楽しみ。

鷗田 その辺の木を拾ってごはんを炊いたりしてね。月に1度ぐらいかな。

山口 それも特におもしろいというわけではないんだけど、変化を求めるといふのかな。たまには違ったことをしてみたいと。— それでは何が楽しみですか。恋人からの手紙？

鷗田 それは、いわずもがな。やっぱり手紙が来るのは1番うれしいよな。

石井 何が楽しかったかという、自然が近くなったことね。何もすることがないから、お月さんが出てくるのをみんなで2時間も待っていたり。

鷗田 月が出ると拍手するんだよね。

山口 僕なんか日本では流れ星なんて見たことなかったんだけど、それが頻繁に見ら

かではコーランスクールに行けば充分だけど、都会には大学まであるし、いろんな局面でヨーロッパの影響を受けた人が増えている。

れてね。1時間か2時間いるともう10個も20個も見られるんだ。それが楽しみだったな。

石井 そのほかの余暇はトランプ。みんな同じゲームを4時間も5時間もやるの。トランプをしたり、歌を歌ったり。素朴な遊びね。

鷗田 娯楽はきわめて不可欠だよな。チームの雰囲気が悪くなると娯楽さえも共有できなくなる。だから適当な娯楽があるってことは、少なくとも悪い環境にはなっていないということ。

— チーム内が悪くなった時はどうやって回復していくのですか。

鷗田 始めは傍観してるんだけど、それでどうにもならなくなったら、みんなで話合った。本当は大きな問題にならないうちに解決すべきなんだけどね。

石井 1つのムンドルに2人でいた時と1人の時は全体の人間関係も違ったように思う。2人の時は部屋に2人でいてもつまらないので、外に出てみんなとおしゃべりをしてた。それが楽しみというのではないんだけど、いやでもしゃべっていると、お互いがわかることもあった。

それがそれぞれ1つのムンドルを与えられるようになると、自分の世界に入れるし、そんな努力をしなくなった。そして人数が増えると自分が関わらなくても誰かが関わるだろうと思うようになったのね。余裕がない時はそんなこともあった。

鷗田 新たな発見もなくなって、感性が鈍くなると、チームの人間関係もマンネリ化してくる。チーム内が悪くなるということは、人数が増えてお互いが見えなくなるってこともあるけど、基本的には個人個人にかかっていて、個人の知覚が縮まらずに敏感ならある程度までは大丈夫って気がする。



午後のひとときをコンパウンドでくつろぐ

ソマリアのことはいつも考えていたい

— 山口さんは現場にいた期間は短かかったんですが、やり残したという気があるんじゃないですか。

山口 これからっていう時に去る時が来てしまっただけ。その時に残るかどうするか選択の余地はあったんだけど、自分の年齢と体力と将来を考えたら、残念ながらもういってもしようがないって。逆に自分がやろうとしたことは植林だから、1年や2年でできないし。長く続けるためのシステムを残せばいいと。方向性をはっきりさせればいいと思ったのでやめたんだけど、やはり心残りは非常に大きい。

— でもレールを敷いてきた満足感はあるのですか。

山口 ええ、それはありますね。

鶴田 それと、その意義を本人が実感したから。

石井 1年や2年ぐらいの活動では短いなって気がする。1年しかいないと思うと、1年のうちになんとかしたいって焦ってしまっただけ。難民は長いこといるんだけど、自分がいる間に満足を得たいと思うのね。私は1年目、一生懸命やったんだけど、何が何だかわからないうちに過ぎちゃった。そして2年目になってやっと自分のペースがわかってきた。そういう意味では、JVCも今後ボランティアの任期は考え方がいんじゃないかと思う。

私は栄養状態の悪い人や病気の人を治療してそれなりに意味はあったんだけど、だんだん空しくなっちゃって。病気というものは栄養状態が悪くなっておこるものなのね。だけどあの人たちは食糧を他人に依存していて、食事が悪くなるとまた病気にかかる。そのくり返し。食糧を自分たちで得ることも大切だし、病気の予防には公衆衛生もやらなくちゃいけない。今度ソマリアに行ったらそういうところに関っていきたいと思う。

— 鶴田さんは東京オフィスに復帰されたんですが、おふたりはこれからの仕事についてどう考えていますか。

石井 またソマリアに行きたいと思っている。でも当分は日本にいて看護婦としてやっていきたい。いつも患者さんのことを考えていられるような、本当の看護婦になれるように努力したい。ただ仕事として看護をするんじゃないで、人間性が問われていることをソマリアにいてすごく感じた。

山口 僕もかつてソマリアに行ったんだなって思い出に留めるつもりはない。大変な自然環境の中で人々は生きていて、もちろん楽しみもあるんだけど、そういう人々と知り合えたのはよかった。これから僕は多分一般の企業に勤めるんだろうけど、同じ時代に自然と戦っていた人たちがいることを考え続けていきたい。そして民間企業に入っても自然破壊に加担するようなことはしたくない。

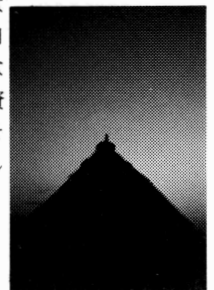
結局ソマリアにいても日本にいても求めていることは同じだと思う。虐げられている人たちと共感しあったり、自然の破壊をくい止めることは日本にいてもできる。ソマリアにいたことが過去の経験に終わらないよう、こういう活動にもなんらかの形で関っていきたい。

* * *

この座談会の後、山口さんがJVC 東京事務所のスタッフとして働くことが決まりました。そのあたりの事情について山口さんは次のように述べています。

ソマリアへ赴任する前も帰国当初も、私は普通の企業に再就職するつもりでいました。しかし、ソマリアでの体験をふり返り、自分がしてきたことの意味を考えてみた時、このまま企業社会に復帰することに疑問がわきました。すなわち、難民救援や第三世界の問題は、日本の日常生活とは関わりない「あちらの問題」ではなく、日本にあって日々の生活の中で食物や資源をつうじてつながっている問題なのです。そのためは、私自身が人々に訴えかけ、行動していくことこそ必要であると決心しました。

(山口)



明日への選択 —— 難民をめぐる変化

JVC事業担当 嶋田三芳

■新たな光明

ソマリア領内にエチオピア難民が流入し始めてから、はや10年近くの歳月が過ぎようとしている。41カ所あるキャンプに約89万人の難民が滞在し、その多くは援助を基盤とした社会をすでに築いている。流入時と比較すれば、表面的には安定したかのように見える難民キャンプ社会も、多くの問題と矛盾の渦中に喘いでいるのが現実である。とりわけ配給食糧の遅延や不足は、生死にかかわる重大事であり、JVCが活動しているソマリア南部のゲドー郡にある難民キャンプでは、雨季前後の3月から5月にかけてこれが頻繁に起きる。そして彼らを取り巻く状況と、彼らの内なる意識が時とともに固定化していく一方で、日々の生活に不可欠な木々は根こそぎにされ、砂漠化が今も着実に進行している。

しかし、この明日なき民の前に、新たな光明が差し始めている。それは、1983年にソマリア政府から打ち出された定住計画に加え、去る12月から始められた“本国帰還”である。昨年1月にジブチ共和国において、シアドバレ（ソマリア民主共和国大統領）とメンギスツ（エチオピア臨時軍事評議会議長）との会談が背景となっているのは、想像に難くない。

この本国帰還を中心的に実施している国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）が発行している月刊誌“REFUGEES”（1月号）では以下のように書かれている。

エチオピアと国境を接する町、ドロ。かつて数十万の難民をソマリア領内に流入させた戦闘の跡が今も生々しく残る。その数ヤード先に車も渡れぬ小さな橋、“故郷へのかけ橋”が見える。

1986年12月4日、午前9時30分。その橋の中央で、エチオピア内務副大臣とソマリア国家難民委員会委員長の二人の要人が手を握り合った。国境となっているこのダワ川の両岸にはUNHCRの職員が控え、ここから172km離れたボルドボ難民キャンプを前夜発ってきた211人の難民が、今まさに“故郷へのかけ橋”を渡ろうとしている。

話は1986年5月に遡る。ボルドボにあ

る4つの難民キャンプの数グループが、自らの故郷に帰りたいたと、UNHCRの地域事務所申し出てきた。6月初旬には、33のグループ、1500人が帰国希望者リストに登録された。これを機会に、UNHCRが両国政府の調整にあたり、また西ドイツ政府団体であるTHWやイタリア政府の援助機関FAIの協力もあって、本国帰還が現実のものとなった。

家族とともに今この橋を渡ろうとしている、一人のオロモ族出身のドヨ・バカジャ・ギンダは言う、「生まれた地に帰りたいた」と。幾人かの子供は、難民キャンプを故郷として生まれ、エチオピア内の彼の地を知らない。「シダモに戻ったら、大地を耕し、家畜の世話をしたい。もしできたらね」とも言う。

UNHCRは、この本国帰還活動にまず70万ドルを既に割り当てた。難民の移送費はもとより、救援物資として食糧と最小限の家財道具類、また故郷での再建に必要な物資として農具や種その他、羊や山羊などの限られた家畜を配給するための費用にも充てる予定である。

さらにまた、両政府やUNHCRなどによ



本国帰還者を見送る（ルークで）



って計画・実行される本国帰還だけでなく、
難民自らが自発的に帰還しようとしている
兆しがあることも付け加えたい。

その後の情報によれば、帰還者はボルドボ地区の
10%に相当する7000人ほどにまで増えつつあり、
今後数カ月は続けられるという。ソマリア全体か
ら見れば、89万人の1%にも満たない数ではあるが、
故郷に戻った人々の定着が進み、この帰還が発展す
る可能性はある。それには、両国関係が改善される
とともに、エチオピア国内の政治的圧力が帰還難民
のもとに及ばないこと、これらが不可欠であろう。

■定住する難民たち

ところで、難民問題の解決方法には、大きく分け
て3つある。今さら言うまでもないが、上述の“本
国帰還”、“第一庇護国内での定住”そして“第三国
での定住”がそれである。もちろんこれらが、難民
問題に対する根源的解決策とは確信できないまでも、
少なくとも“難民が難民でなくなる”のに、有効な
手段であることは間違いない。

次に、極めて自発的に“第一庇護国内での定住”
に努めている集団を紹介したい。ルーク地区の最北
端（すなわちJVCが活動しているマガネイ・キャン
プと正反対）に位置するハルバII・キャンプから脱
出した難民たちで、以下はその集団のリーダーに行
ったインタビューの一部である。

- いつエチオピアから逃れてきたの
K氏：1979年だった。エチオピア南部のバ
レから来た。
- 今いく人の家族と暮らしているの
K氏：20人。妻は2人いるよ。
- 住みやすい難民キャンプを出て、な
ぜここに定住し始めたんだい
K氏：自分らの農場がキャンプから遠くて

ね。毎日行ったり来たりが大変で、
近くに越して来たのさ。

——じゃ、食糧配給は受けてないのかい
K氏：いや、受け取っている。でも一部の
者は受けてない。

——どうして、もらっていないの
K氏：……………。（K氏は答えてくれなかつ
た。後で通訳のソマリア人にきくと、
部族上の差別からもらえないと言う）
——ここに住んでいるのは何家族ぐらい
K氏：350家族いる。

——百姓の経験はあるの
K氏：農民と遊牧民のどちらもいる。でも
今は、みんな農業ができる。
——食糧配給を受けていると言ったけど、
もし、この土地で十分な作物が得ら
れたら、食糧配給は止めるかい
K氏：やめる。でも、ポンプや飲み水、輸
送手段、それに健康などに問題があ
ってね、困っている。
——エチオピア国内の故郷に帰りたくな
いかい

K氏：問題がなくなったら帰りたいと言っ
ている者もいるが、ここで農地を持
っている者は帰りたくないと言う。

このような自発的かつ自立的定住に向けて歩み始
めたグループは、小規模ながら、いくつもある。そ
して今、ソマリア政府、UNHCR及びNGOが共同
し、世銀の資金協力も得て、ファルジャン定住計画
をスタートしようとしている。

難民たちの間に2つの噂が拡がりつつあるときく。
“今年の半ば頃から配給食糧が半減される”という
厳しいものがひとつ。そして、“故郷に帰れる。ソ
マリアに定住もできそうだ”という希望に満ちた噂
も一方にある。しかし、この両方の噂や計画が早急
に現実のものとなるか否か、私は少々疑問視してい
る。計画そのものが、時として無価値になるソマリ
アで、計画通りに事を進める困難さは今後も変わら
ないであろうし、政治がらみの計画は極めて不確定
であるからである。

とは言い、固定化しつつあった“外的環境と内的
心象”が流動的になる中で、難民たち一人ひとりが
“明日への選択”を熟考し、自らの路を歩み出す日
がそこまで来ていると言える。

補助給食はだれが食べるの

——たくましくて悲しい人々——

看護婦 石井弘代

《ソマリア人がわからない》

「ちょっとそこのお母ちゃん、お母ちゃんが食べんと子供に食べさせなげよ」。まだソマリ語も全然わからない時、私はこう言って母親に怒りをぶつけたものです。栄養状態が悪い子供たちに補助給食を開始してまもない頃でした。給食を持ち帰りにすれば他の元気な子供たちが食べてしまうからと、家に持ち帰ることは禁止しました。1人では食べられない子供がほとんどなので、母親か父親に付きそってもらい、とにかく本人の口に入るようにと考えていました。

我々が口をすっぱくして補助給食の必要性を言っても、「もう子供がほしがらないから」と食べさせる努力をしないですぐに持って帰ろうとする母親もいます。中には遠い道のりを朝夕2回給食センターにやってきて、子供が吐いてもあきらめず、ゆっくり時間をかけ一口一口食べさせている母親の姿も見られました。しかし私はほとんどの母親に対して子供への愛情が薄いのではないかと感じたものです。子供が亡くなっても1時間もすればもう笑っている家族を見て、わけがわからなくなってしまいました。「ソマリアの人が何を考えているのかわからない。根本的に考え方がちがうのではないか」そう思っていたのがいつからでしょうか、理解できたとは言いがたいけれど少しずつ見え始めたのは……。ソマリアの習慣、人が少し見えてきた頃から彼らが少し近い存在になっていったような気がします。

《弱い子供から死んでいく》

私の働いていたマグドールキャンプは、約1万5000人が集まる新難民のキャンプでした。1984年末にエチオピアから逃げてきたせい、数年経った他の難民キャンプとはちがいで、子供、大人を問わず人々の栄養状態は悲惨なものでした。家はアッカルといってアカシアの木でドーム型に骨組みをつくり、その上にダンボールや、配給に使われた袋をかぶせた質素なものでした。半砂漠地帯なので昼夜の温度差は激しく、日中は5分ぐらい歩いただけでめまいを感じたり、皮膚にビシビシと刺し込むほど強

い日射しなのに、朝方ともなれば毛布がないと肌寒いのです。

風の強い翌日は必ずといっていいほど多くの人たちが、発熱したり喉を痛めたりしてクリニックにやってきました。その中でも特に栄養状態の悪い子供たちは抵抗力がないために亡くなっていきました。マグドールの人の多くは朝夕はお茶だけ。昼は配給のトウモロコシの潰したものを煮て、塩で味つけて食べていました。配給のない日は、1日中アッカルの中でじっとお茶だけ飲んで飢えをしのいでいると聞いた事があります。「我々は補助給食しているのに肝心の主食がないとは」とスタッフで空しくなったものです。

母親たちはなんとかこの補助給食を、我々の目を盗んで家に持って帰らないといけないわけです。家に帰れば夫をはじめ、多くの子供が待っているのですから……。

ある時「日本では子供は何人ぐらい？」と聞かれた事があります。「1~2人で多くて3人ぐらい」と言うと「そんなに少なかったら子供が死んでしまったら困るのに」と、不思議そうな顔をしたのを覚えています。困るというのは労働力の事かも知れないし、子供がいなくなったら淋しいという想いもあったのでしょうが、たえず彼らの隣には生と死が直面しているからこそそう考えるのだと思います。栄養状態の悪い子から食べさせてあげたいと思っても、どの子も生きられるとは限らないのですから、助かる可能性の強い子に食べさせようとするのも親心かも知れませんが、今日も明日も明後日も食べられると知っている私には、やっぱりわからないんだろうなと思います。

《今しか生きられない》

貧しいながら少しキャンプの状態が落ちつくと、患者の家庭訪問でキャンプを歩いても「お茶を飲んでいかないか？」と声がかかるようになりました。栄養状態の悪い子（カルトーマ）の経管栄養や点滴のために毎日といっていいほど通っていたのですが、その家もマグドールのどこにでもみられる家

庭でした。

その子供の母親は2番目の妻で、夫は1カ月に1週間ぐらいちがうキャンプからやってきました。子供は6歳、4歳(カルトーマ)、2歳の3人です。その家庭にいくと必ずといっていいほど、父親はアッカルの中で寝ていました。ここの女の人たちは朝早くから水くみ、薪運び、育児、家事と休む暇もないぐらいよく働きます。が、男の人たちはというとゴロゴロしているか、1日中お茶を飲みながら喋っているようにしか見えません。もちろん今は働きたくても働き口はないし、遊牧すべき動物も無いわけですから仕方ないといえば仕方ないのかも知れませんが、やはりソマリア女性のバイタリティには驚くばかりです。難民キャンプでの売春は1回砂糖1kg(約100円)と聞いた事があります。女は大変だなーとつくづく思います。

昼になると妻は夫に食事を持ってきます。私の分もです。出された物を拒否する事は失礼なようです。「お腹一杯になった」と言っても「もう一杯」と勧めてくれますが、妻は何も食べません。「一緒に食べよう」と言っても首を横に振るだけでした。その日は量が少なくて彼女の口には何も入らなかったようでした。気になって食事風景を観察していたら、どこの家でもほとんど変わりません。まずは男の人(12歳以上の男子)が食べ、その後小さな子供、女たちが食べます。食べる物のない親族や同じ部族の人が来ると少ない食糧をわかちあいます。これがイスラム教の教えです。

その結果小さな子供、母親の口に入るのは少なくなってしまうというわけです。自分の食べる物がなくてもいつも陽気な顔で接してくれていた母親たちが、栄養失調の我が子の補助給食を我々の目を盗んでも食べなければいけなかったというのは、本当に生死ぎりぎりだったんだなと思いました。彼らは大変な状況で生きていると頭でわかっている、私は満たされている者からの発想しかできなかった事を感じました。

結局カルトーマの子供は髄膜炎という後遺症を残し、しゃべる事も自分で体を動かす事もままならず、人の手によってしか食事を摂取できない状態になってしまいました。それでもこの家族の看護で8カ月間生き続けました。死んでしまったというより、よくまあこんな厳しい状況の中で生きれたものだと思います。亡くなったと聞いて家に行くと、母親は笑顔で迎えてくれました。子供に対しての思いを何か

語るでもなく、いつもと変わりなく働いているように見えました。昨日のために生きているのでもなく、明日のために今日を生きるのでもなく、今を生きているからこそかも知れません。この大自然の厳しさの中で彼女たちが知らずのうちに身につけたのは、このたくましさかも知れないと思いました。

《難民の悲劇とは》

このマグドールの多くの人たちが政府の方針で他のキャンプに移されましたが、1986年10月突然の移送中止命令が出て、数千人の人が今もマグドールに残されています。親子であっても離れ離れになってしまった人も多くいます。新しいキャンプでは配給を以前より規則的に受けることができ、人々の生活も一見落ち着いてきたように見えますが、仕事もなく食べる事を配給だけに頼っている彼らが、平和であった彼らの土地へ帰れる日はいつの事なんだろうと思ってしまいます。難民となった人にとっての一番の悲劇は、明日の事さえ自分で決められない、夢が持てない事だと思います。

私にはソマリアで好きな景色がいくつかあります。その中でも一番好きなのは、午後の仕事が終わる夕日が沈みかけた頃、キャンプのあちこちから小さな灯がともし始める光景です。真暗な世界がポツポツと明るくなると「あー、今日は配給があったんだなあ」と思います。

《我家のめいたちと》

今私は久しぶりの我家で、食べては寝、本を読んだり、テレビを見たりのゲータラ生活をしています。姉がお産のために帰ってきているのですが、3歳と4歳のめいは、飢えるという事がどういう事なのか知るすべもなく、お腹一杯食べ、思う存分真白な画用紙に絵が描け、夜はおじいちゃんが読んでくれる絵本を見ながら眠りにつきます。健やかに育てほしいと願うのと同時に、ソマリアの人の事を忘れちゃいけないと思います。

まだ上手にしゃべれないめに「おばちゃんはどこへ行ってたんだ」と聞くと、「アフリカのソマリア」と言います。「何しに行ってたん?」「お腹がすいている子供に御飯持っていってた」と答えます。何の事かまだ理解できないめいたちが、この同じ地球で、同じ時を過ごしている人たちの中にはいろんな人がいる事を自覚するのは、いつかなと思いつつ、私もがんばらなあかんと思う今日このごろです。

JVC 農場の風車と水車

風の学校 中田 正一

ルークのJVC難民定着農場

私が最初にソマリアのルークを訪ねたのは1985年の8月初めであった。この季節はとくに風が強く、昼も夜もゴーゴー音をたて、激しい時は砂嵐でジープも進めないほどであった。JVCが担当するエチオピアから逃れてきた難民たちの定着農場は4カ所で計50haである。どの農場にもイタリア製のディーゼル・ポンプがすえつけられ、ジュバ川の水面から土手の上まで4~6mの高さを揚水していた。水さえあればどの作物もよく育っていた。難民定着農場は合計600haと言われていたが、私は久保祐輔さんの案内でフランスチーム担当の農場とソマリア政府の担当する農場も見せてもらった。

JVCの農場に1週間滞在させてもらったが、ルークの農業の最大の問題は水だという結論に達した。年間降水量200mmでは灌漑しなければ作物は育たないことは明白である。その灌漑は専らディーゼル・ポンプに頼るのであるが、ディーゼル・オイルの補給がきれる時がある。前年の1984年秋には3カ月間、85年春には2カ月間ディーゼル・オイルがなくなった。そのため畑の作物はほとんど枯れてしまったという。石油の出ない国、石油を輸入する外貨も不十分な国であるという事実の前に私が到達した結論ははっきりしていた。風の強い国だからまず「風車」、川の流れが速いから「水車」という結論である。

エジプトのサキヤとマダガスカル風車

アフリカに現にある技術ならすぐに間に合うだろう、というのが私の考えであった。そこで、まず調べたのがエジプト、ナイルデルタでの稲作や畑作の灌漑に古くから使われている牛力水車「サキヤ」である。約1週間カイロ周辺で調べてみた。水車(トタン板製)の半径が水の揚程になるので、せいぜい1.5~2m程度しか水が揚がらない。これではジュバ川(4~6mの揚程)では無理だとわかった。

マダガスカル島は牛の多い島でゼブ牛が1200~1300万頭いる。放牧地に井戸を掘り、風車で水を揚げて牛の飲用に供している、と聞いていたので、こんどはマダガスカル島へ渡った。JICA 専門家の下條道夫さんの世話で風車について調べてみたが、

ここは多翼式の風車であり、牛や人の飲用程度ならよいが、灌漑用には水量がいまひとつ気に入らない。こんなことで8月末、風車と水車のことを頭に描きながら東アフリカ50日の1人旅から帰国した。

風車偏歴

帰国後直ちに友人の丑田晋さんに頼んで山田式風車の見積りを取ってもらった。この風車は赤城山頂や茅ヶ崎の海岸で回っている発電用のものである。かつて北海道に多く作られ、今タイ国にあるJICAの水産プロジェクトにもある。見積ってもらったが直径10mの風車で数千万円はかかる。これではらちが明かない。

農業地域の元老鏑木豪夫先生に相談したところ、足利工業大学の牛山泉教授が風車では日本の権威だからと紹介される。早速牛山先生を訪ねて指導をうける。また牛山先生の紹介で筑波国際農業研修センターの三浦保教官にも協力を求める。ここでは海外からの研修員に対し、いろいろの風車を作成して教えているからである。

たまたまその年の12月、私はタイ国へ行く機会があった。その時、バンコクの西南海岸の塩田地帯で海水を塩田にくみ揚げるための風車が何十基も回っているのを見た。揚程は1~1.5m程度であるが、きわめて簡単で、竹製の6個の3角帆を使っている。

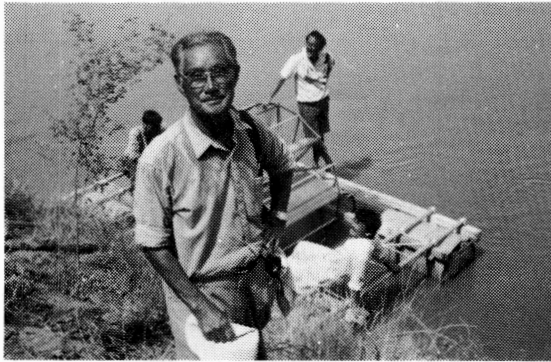
千葉県の子白町に風車発電の研究を長年続けておられる加藤博さん(セファタービン研究所長)に会い、私の所から車で1時間の距離をタイの風車の写真をもって出かけた。

加藤さんにソマリアのルークの事情を話して試作をお願いした。加藤さんはタイの風車の写真にヒントを得たらしく、ビニールシート製の6枚帆のタイ式風車を作ってくれた。これを86年4月初め風の学校大多喜分校の入り口に設置したが、約1年後の今も快調に回って水を揚げている。

浮遊式水車と取りくむ

風車は風次第で回る。ところが水車は水の流れて24時間休みなく回るわけで、動力としては風車より安定している。私はドラム缶を浮きにして揚程5~

ジュバ川を背にした中田さん、とても80才とは思えない



6mの水車が出来ないものかと加藤さんに持ちかけてみた。二つ返事で「できるかもしれない」という反応であった。それから2カ月、加藤さんは試行錯誤を繰り返しながら、やっと作りあげた。直径1.5m、幅60cm、グラスファイバーの水かき羽8枚をもった水車、これをドラム缶6個の浮きで川に浮かべる。水車が1回まわると手押しポンプが1回動き水を押しあげるといった仕組みである。

初め4mの揚程での実験に成功、次に7月27日夷隅川の急流に浮かべ、揚程を8mにまであげて実験成功、その翌日分解してJVC事務所を経由してソマリアへ発送した。引きつづき風車も新たに3枚羽根のものを加藤さんに作ってもらってソマリアへ送った。

風車と水車による揚水はじまる

私は昨1986年10月22日ルークへ到着した。風車はすでに現場へ到着していたので、翌日JVCの農場事務所近くの川端に風車を組み立てた。この季節は風が少なく、時々吹いてくる風で3枚羽根の風車が軽やかに回り、5m下の川面から快調に水をあげた。1日のうちには何回か強風があり、その時は風車はブルブル音をたて、ポンプはガボガボ水をあげた。風速計で測ってみると秒速1.5mの微風でこの風車が回りはじめることがわかった。ここルーク地方では年間の平均風速が2.5mであるから、結構ジュバ川からの揚水には役に立つものと思われた。

私はルークには9日間滞在する予定であったが、8月初めに発送した水車の荷物が到着しないので、いらいらしていたら、出発の2日前になって4個の大きい梱包がルークの現場についに到着した。直ちに日本のスタッフと現地スタッフが協力し、ドラム缶6個で作る浮きと水車の本体を組立てた。その翌日JVCの総力をあげて川辺に運び、オミコシかつぎのように水車をかついで川岸の急坂を降り、ジュバ

川に進水させることができた。組み立てた水車の重さは150キロはあったようで、担ぎ人は20人をこえ、ジュバ川に浮ぶ水車を見てみんなで歓声をあげた。

予想した通り水車は回り、5mの堤防上へポンプで水をおしあげた。ジュバ川の流速は毎秒1mの速さであり、ゴットン、ゴットンと軽い音をたてながら回り、順調に水をあげることができた。予定した9日間の日程内に、私は一応の任務を果たしたことを喜び、その後のデータとりやメンテナンスをお願いし、翌早朝ルークを後にした。

適正技術の開発はこれから

すでに述べてきたように、JVC農場での風車と水車については、やっと1年間でここまでたどりついた、という感じである。ソマリアにおける技術として定着させるのはこれからである。現地材料で現地の人が作り、現地の人々がメンテナンスできるものでないと長く定着するものとはなりえない。これを適正技術(Appropriate technology)と呼んでいるが、私はソマリアの事情に適應する技術を開発するつもりで加藤さんはじめ皆さんの協力を得ながら進めてきた。

そして今、手掘りによる井戸掘り技術に取り組み始めた。上総掘りの掘り方であるが、竹を使わない方法で始めている。これについても加藤博士のアイディアで進めているが、急いでも、使いものになるには少なくとも1カ年の実験を必要としよう。目鼻がつけば第1番にソマリアのJVC農場へ持って行きたいと思っている。

風の学校

農業によって自活し、その技術によって途上国に海外協力をしようというユニークな学校である。現在国内の分校は11、海外にはタイやフィリピンなどに4校ある。国内の分校ではそれぞれ1～3人の生徒が途上国にも活用できる適性技術を学んでいる。

*風の学校では学校を運営するための協力会員を募集している。会員は1年1口3,000円か、それに相当する物品の会費を治める。

送金先：郵便振替口座 東京7-120537

風の学校

銀行口座 千葉銀行 大多喜支店

☎ 2017531 風の学校

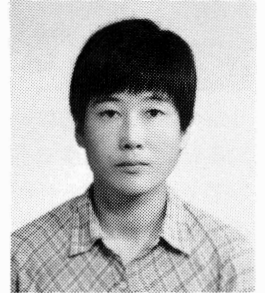
物品の送先：〒298-02 千葉県夷隅郡大多喜634-5

風の学校事務所

Tel 04708-2-2515

続 女の仕事について

農業技術者 伊藤 幸子



恵泉女学園園芸生活科卒。農業技術者の達男さんとはおしどり夫婦。これまでタイのコーヒー園などで農業指導を行ってきました。ごらんのようにスケッチの腕もなかなかのものです。

①コーヒーを入れる。エチオピアがコーヒーの原産国だって知っていましたか？マーシャ村ではちょっと寒くて、コーヒーの木は見られませんが、低地では栽培されています。市場でも赤く熟した実、皮を取り除いた豆、そして乾燥させた皮も売っています。人々は日に3度コーヒーを飲みますが、まずコーヒー豆を洗うことから始まります。そして鉄板で

豆をいり、臼で粉にします。その間に、コーヒー用の土製のポットにお湯をたぎらせておきます。その中に香りの良いひきたての粉を入れて少し煮るとできあがり。中国製の小さな茶わんに入れて出されます。塩を入れて飲む人もありますが、普通はなにも入れません。おつまみに大麦のいったものなど一緒に食べます。



②畑から取れた大麦・小麦・豆などには泥・小石などいろいろまがっていますから、調理する前には、ていねいによりわける仕事があります。女の人はこのような綿のワンピースを着、ウエストに布をまいているのが普通です。



③この包丁は、日本のもののように刃がまっすぐでなく、湾曲しているので、私たちがじゃがいもなどの皮をむこうと思ってもなかなか思うようにはいきません。こちらの人は、じゃがいもなど皮つきのままゆでますし、他の物も大きく切ってゆでています。

④これは低地からきた綿を糸に紡いでいるところです。そこらにあるもので作った簡単な道具で、綿を糸にしてしまうのです。古くてひびの入ったひょうたんなどを直径5 cm程の丸い型に切って、まん中に穴をあけます。曲げた針金をさしこんだ細い棒をその穴に入れて、ゆるければちよいとつばをつけて少し綿をまいてやれば動かなくなります。そのまがった針金で綿をひっかけて伸ばしてやりながら、クルクルと回してやると糸ができるんですからね。



⑤週一回市場のある日は、売ったり買ったりし終えた人たちで酒場が混みます。酒場と言って何も普通の家と変わりはないのですが、小さいマーシャ村に何軒もお酒を飲ませる家があります。お酒は3種類あって、前回紹介した焼酎のような蒸留酒、麦類やゲシヨと呼ばれている木の茎や葉を使ったビールのような一見“馬のションベン”はアルコール分が少なく子供たちも平気で飲んでいきます。

東金に農場を作ります

JAST 代表 井本勝幸

I 自給自足をめざす

千葉県東金市に JVC が農場を開きました。スタートは、この 3 月。国内にも農場を持つと決めてのは去年の 8 月のことです。それ以来、3 月のスタートを目指して家の改修作業や農地整備に取り組んできました。築年数 140 年の古い家。それに農地として 4 反の田んぼに 1 反の畑、1.5 反の梅林が東金農場です。

なぜ、東金に農場を持つのか、何のためにやるのかと今まで JVC で、JAST で、そして東金の農家の人達との間で話し合いがなされてきました。

遠くアフリカやアジアの活動の中で、難民の人たちに自立しろ、自立しろと言っていますが、それじゃ自立って何なのだろう、果たして私たちは自立しているのだろうかという壁に当たってしまったのです。実際、私たちの生活を考えると、食べる物、着る物、住んでいる家の材料等の大半が遠い海の向こうから運ばれてきています。その上に資源やエネルギーの浪費、さらには世界中の緑や環境を破壊させながら私たちの生活が成り立っているともいえます。先進国に住む私たちも第三世界の人たちも真の意味で、共に自立していくことが目標です。そのためには私たちはもう一度自分の生活を見直さなければなりません。東金農場の第一の目的は、農場に住み込む人が自給自足を目指すことです。

II 地元の人を第三世界へ

第二の目的は、東金の農家の人に実際に第三世界へ行ってもらうことです。第三世界と私たちの問題に気づいているのは、ほんのひと握りの人だけです。この問題に、東金市民という一般の方が関わることの意義は大きいと思います。

なぜ東金を活動地としたのか。単に自給自足を目指すだけならば、人里離れた所でもできますし、有機農業を確立していくこともできます。しかし、それだけが問題なのではありません。確かに自給自足や有機農業を確立することは一つの目標ではありますが、さらに大切なことは、第三世界の人々の大半は農業を営んでいて、この農業を通して第三世界の問題に充分関わる事が出来るということです。第

三世界での問題に気づいている人々の積極的な行動と日々農業を営んでいる農家の人々が力を合わせ、第三世界の問題をより多くの人の共通の問題とし、何らかの行動をおこす、そのため、最初に東金に住んでいる農家の人に第三世界へ行ってもらう、これが第二の目的です。

普通の農村地帯に入るということは、それだけでも難しいことです。その土地の習慣や、近所づきあい、さらに、大半の農家が行っている近代農法との関係（私たちはなるべく機械化は避けようと思っています）、衰退していく傾向にある日本の農業の問題にもろにぶつかることになります。まさに、あらゆる問題と矛盾を抱えた中でのスタートです。これまでに、JVC のスタッフや JAST のメンバーがいっしょに農場の作業に行き、地元の人たちを夕食に招待したり、地元の大学生が来て泊まっていったりと、交流を持つ場も作ってきました。はっきり言って、私たちは農業に関しては、まだまだしろとすし、若い JAST に果たしてどこまでやれるかという不安は残ります。

III 地域社会とつなぐ

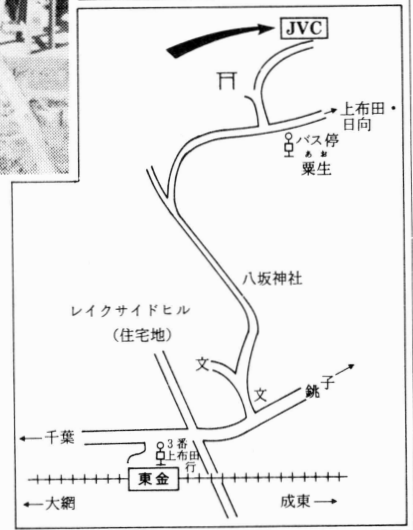
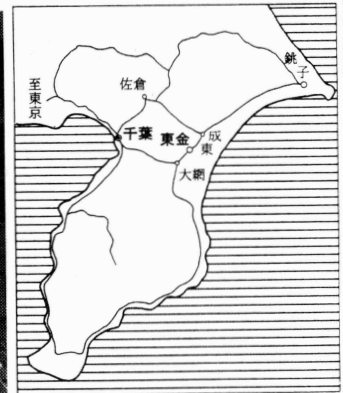
今年に入ってからの農地整備作業では、「今時、かまどくわでやってる連中がいるよ」と、地元の人が心配気に寄って来て、手伝ってくれました。またなんとかして農地にしようと、皆で汗を流して泥まみれになってがんばった苦労の末、去年借りた時には一面に雑草や木が茂っていた荒れ地が、きれいになりました。

今年は隣の田んぼの様に立派なものはつくれないかもしれませんが。実際に表面に出ている雑草を刈って、焼き払ってしまっても、地下には無数の根がはっていてくわも入らない所もあるのです。けれどもどんなに土の状態が悪くても、ちっとも収量が上がらなくとも、とにかく農業をやる。そのためには日々努力していく姿勢を大切にしていかなければなりません。今までに何度もこんな大変な土地はやめてしまおうと思いましたが、いろいろ考えながら作業していくうちに、土地に愛着が出てきました。地元の人もアドバイスに来てくれます。あれだけ大変な

東金農場



農作業も終わってのんびり日なたぼっこ



住所：〒283 千葉県東金市松之郷粟生3146
Tel 04755-2-5210

宿泊料：一泊500円，食費：800円(3食)です。

* 東金駅前から上布田行(3番)のバスに乗って
粟生下車，徒歩3分。

土地がただけに、かえて良いかたちで地元の人たちとの関係が生まれて来たのではないかと思います。

地元の人から農業を教わり、私たちは第三世界の情報を地元へ伝えるというキャッチボールの関係を築くこと、これが“地域社会とのつながり”という第三の目的です。

大ぜいの人の参加を

またさらに、他団体や様々な企画を通しての合宿や勉強会等、日本社会との交流も計ろうと考えています。具体的には、子供たちの林間学校や、日本とアメリカの高校生の交流合宿、5月の田植え大会、9月の稲刈り大会。日本国内に住んでいるインドシナ定住難民の人たちの農業体験、それに夏祭り等の計画が、今のところ上がって来ています。こうした交流活動を通して東金農場へやって来た皆が、問題を共有して考えるようになって、地域と都市、地

域と地域、さらには、地域と世界というつながりをつくってけるのではないかと思います。

誰もが誰かともちつもたれつの関係、キャッチボールの関係にあることを、実際に肌で感じる必要があります。

さて、肝心の農作物の年間作付計画ですが、菜っ葉類に大根、トウモロコシ、大豆、梅、米、セリ、等を育てていきます。特に、大豆はみそ、しょうゆ、豆腐に、梅は梅干し、梅酒にと加工品としての生産も試みるつもりです。農作物をつくるにしても、農産加工品をつくるにしても、興味のある方の参加を待っています。一緒に何かをつくりましょう！

そして、なによりも体を動かす作業をすることって、とても気持ちいいものです。農場で働いた後、家に帰って食べるかまどでたいご飯も、とてもおいしいですよ。農業に興味のある方、田舎に興味のある方、そして、こういった活動に興味のある方、いつでも泊まりに来て下さい。待っています。

月明かりの群舞

星野昌子

83年の10月、JVCが活動しているソマリアのルークを訪れたことがあった。大型の傘を広げたようなアカシア・アラビカの大木にはさまざまな鳥たちが集まり、飛び立つ。その木の下で難民たちのダンスが始まろうとしていた。夕方から砂じんを巻き上げて吹き荒れた風もぴたりと止み、月明かりに人々の姿が浮かび上がった。

まず男たちの踊りから始まった。腰布をまとい、上半身はシャツ姿もあれば裸もある。故郷のオガデンではこの日のための晴れの衣裳もあっただろう。すべてを失い難民となった彼らではあるが、体内を駆け廻るリズムと詩、そしてそれらを表現することのできる精やかな肢体だけは残されていた。

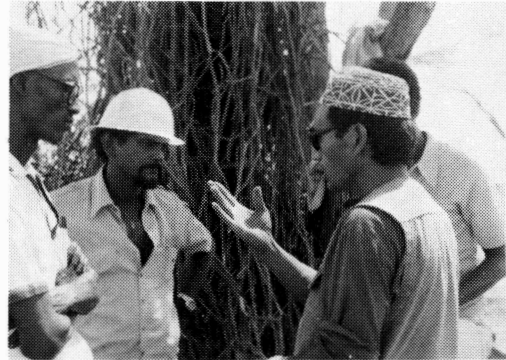
通訳のモハメッドが英語で説明してくれる。

「ソマリ族は踊りが好きです。オガデン地区だけでも十種ぐらい、ソマリア全土では百種を超える踊りがあります。このあたりの男はまず強くなければなりません。バネのような跳躍で強さを示し、女心を誘うのです」。

続いて女たちが20名ほどトラックで到着した。はじめは男たちの踊りを見入っていたが、やがて自分たちも少し離れた所で踊り始めた。女たちはなまめかしく腰を動かし、彼女らの興奮とともに歌声のトーンも上がっていく。その歌に引き寄せられたように男たちが女たちの輪に加わった。今度は男女それぞれ列を作り向かい合い、さてこれからペアを組んでどんな踊りが始まるのかと観衆がかたずを呑んで待っていると、突然列が崩れ始めた。踊りが中断されてしまったのだ。

「ここから大切なところに入るのに、男たちがステップの踏み方を忘れてしまっていると女たちが怒っているのです」とモハメッドが説明する。再び試みたがやはりだめであった。ステップを知っている人たちは年老い、若者たちは難民として暮らすうちに踊る機会もないまま忘れてしまったのだろうか。

人々のいらだちが私の胸にも伝わってきた。男たちをなじるような言葉を投げ捨て、女たちはさっさと車に乗って引き上げてしまった。「イスラム社会の弱い立場にある女性」と、私が勝手に抱いていたイメージから彼女たちのこの毅然とした行動はあま



現地人スタッフとありし日の山賀さん（右側）

りにかけ離れたものであった。

明け方まで続くはずであった群舞は空しく中断され、JVCスタッフの指示に従い人々の群れは静かに去っていった。

ぼんやりと彼らを見送る私に山賀さんが声をかけた。「くる病の女の人と一緒に踊っていましたね。この人たちの社会は障害者にも開かれているんだなあ」。山賀さんはライ患者の自立を助けるための農業指導を生涯の仕事として選び、タンザニア、インドネシアで働いてきた。JVCの仕事が終わったら、いつかその仕事に戻りたいという。私が群舞に酔っている間にも山賀さんはその踊り手の姿を見逃さなかった。私もその踊り手を目で追ってみたが、月光と砂ぼこりに足元から包まれ、音もなく遠ざかっていく人々の長身の姿しか見ることができなかった。

視察から戻って書いたこの原稿は活字にならなかった。それからわずか三年しかたっていないのに、ご葬儀に参列することになるとは思いもよらないことであった。暮の頃から病いの床にあられると伺い、JVCのメンバーも時折お見舞に伺っていたのだが、こんなにも早く逝ってしまわれた。訃報を聞いてアフリカから駆けつけた方を始め数々の友人代表者は、彼の人物や理想を尊敬し募う全員に代わり、「これからという時に病に倒れた口惜しさ」を語った。それはまた山賀さんご自身の声をも代弁するかのよう響いた。

ここに改めてご冥福をお祈り致します。山賀さん、どうぞ安らかに眠り下さい。そして残されたご家族の皆様、今後の私たちの活動をも見守って下さい。

タイの仲間たち

ノンチャン



- ① エイドリアン・ブルームバーグ
- ② 1960年1月23日
- ③ オランダ
- ④ 1986年2月
- ⑤ YWAM という他のボランティア団体（在

ノンチャン・キャンプ）の医療チームで、2年間働いた。

- ⑥ ノンチャンで働いているうちにJVCを知った。YWAMで2年間働いたので他の仕事がしてみたいと思った。しかしノンチャンの人々とともに居たかったので、JVCで人手が入用と聞き申しこんだ。
- ⑦ ノンチャン・キャンプでは妊娠中の母親と、3歳以下の子供のすべてがドライパックをもらえる。これを取りに行く前に母親たちは栄養と、初歩的健康管理を教わるためのクラスに行く。私の仕事はこれらのレッスン用にそのプランを書くことと、教材や教師の手配をすることである。
- ⑧ 私はJVCで働くことをエンジョイしている。大規模な組織から来てみると、小さなチームで働くことはすばらしい。物事の決定に関与するチャンスが個人個人に、より大きく与えられているし、また皆がよく知りあえる。
- ⑨ 今のところクメールの人といっしょに働くことと、タイにいることをエンジョイしている。期間についてははっきりしないが、もうしばらくはいるつもりである。そしていつか、カンブチアに入れると思う。
- ⑩ 私はクメール人は特別の人たちだと思っているし、彼らのために働くことは素晴らしい。あの状況の中で彼らがいかにして生き、またどんなふうに希望を持つのかを知ることは驚きである。私はすべての人々がここに来て、見て、そして彼らに会うことができるよう願っている。ここで働くことを可能にしてくれているJVCオフィスの方々の御努力に感謝している。（87年1月まで）

- ①名前
- ②生年月日
- ③出身地、国籍
- ④JVCに入った、あるいは活動に参加した日
- ⑤JVCに入る前は何をしていたのか
- ⑥なぜJVCにかかわったのか
- ⑦仕事の内容
- ⑧JVCについて感じていること、または提言
- ⑨これからどのようなことをしたいか
- ⑩ほかの国で働いているメンバーに伝えたいこと。



- ① スリペン・シーパヤ
- ② 1956年2月25日
- ③ タイ
- ④ 1986年2月1日
- ⑤ CRS（アメリカのNGO）で、栄養担当のスーパーバイザーとし

て2年ほど働いていた。

- ⑥ JVCを知った時点で、私は他の団体で既に同様の仕事をしていました。そしてJVCが良い団体で、難民や貧しい人々の救援に真剣な努力を払っていることも知っていました。そのJVCに栄養士のあきがあると聞いて私は応募する決心をしました。JVCのプログラムから何かを学べそうだと考えたからである。
 - ⑦ 栄養士。栄養教育や補助給食の手配を行い、プログラム改善のために家庭訪問をし、情報を収集する。またキャンプ内の母親と子供の健康状態観察のため、MCH（母と子の健康管理）、公衆衛生、病院やOPD等他のプログラムと密接につながって活動する。
 - ⑧ JVCには貧しい人々を助けるためのきちんとした方針があり、無給あるいはごく低額のサラリーで働く多くの人々がいる。タイのJVCとしては、現在のところプログラムの進み具合は良好である。
 - ⑨ まずベストをつくり、自分の責任下にある仕事に気を配る。そして問題が生じた場合は、自分の属する団体でも他の団体でも、等しくそのスタッフと意見を交換し、一緒に働く人々と考えや知識を共有していきたい。
- 難民の人々が将来も引き続き援助が受けられることができ、そして自分たちの手で自立する道を見つけられるようになることを望む。私自身はあと1年はクメール難民のために働くつもりである。
- ⑩ あなた方は一生懸命に働いても、わずかなお金と少しの食糧、少しの快適さしか得られないかも知れません。でもあなた方はたくさんの愛を得ています。

MY DEAR FRIEND

「始まるまで待てない
プロジェクト」からのメッセージ

石 森 豊

あまり知られていませんが、JVCに「始まるまで待てないプロジェクト」というグループがあります。昭和60年8月の結成以来、いろいろな活動をしてきました。メンバーは会社員、主婦、学生等です。それぞれいろいろな条件を抱えているので、ボランティア活動を継続するのが難しい人々です。このグループのメンバーにならなければ、おそらく、たまたま1人でJVC事務所にきて運良くT/Eの発送を手伝えるとか、さもなくば単なる定期購読者で終わっていた人々です。

つまり、横のつながりもなければ、JVCや他のボランティア活動との関わりも薄く、JVCの存在を他の人に知らせる力も弱いバラバラの人々でした。しかし、「——待てないプロジェクト」というグループに参加することで、各人は単なる1人ではなくなりました。各人にも変化が起こり、今では何人かが集まれば必ず何かができるという確信を持ち始めています。

まずこの1年に行った事を述べましょう。

上映会、勉強会、サッカー大会、コンサート大会、バザー、山の手チャリティーウォークへの参加、劇団JVC上演の手伝い、スタディツアー、東金農場作業支援、サヘルの会設立の手伝い、山谷見学会、等です。このうちどれか1つは読者の方も覚えていると思います。

活動は今も続いています。まだまだメンバーが不足しています。どうか皆さんも参加してみてください。連継プレーで活動していくには、1人でも多くの人の参加が、協力が必要なのです。チームワークと連継プレー、これが今も重要な内部課題なのです。

現在も続けている活動を挙げましょう。まず、T/Eの付録「JVC TODAY」の発行。意外でしょうが、これは「——待てないプロジェクト」のメンバーが復活させ、担当しているのです。次に、日本語家庭教師の機関誌『そんぼっと』に連載をしています。そして、絵本を作って売り出そうという「絵本プロ



ジェクト」。支援中のものは「東金農場」、「サヘルの会」です。

どうでしょうか、多様だと思いませんか？これが「——待てないプロジェクト」の特徴の1つなので。ボランティアといってもいろいろな関わり方がある、と私たちは思うのです。私たちは一見JVCと関係のないような活動も、敢えて行います。それで良いと思うのです。日本の社会は、ボランティア活動に対してまだまだ固く扉を閉ざしています。その扉を開くためには色々な方法があるはずですよ。

最後に現在検討中、計画中のものを挙げてみます。「バザー班の再生」「秋のチャリティーウォークへの参加」「待てないプロジェクト定期イベント」「第3回上映会」「第3回(3月)、第4回(4月)山谷見学会」です。あなたも参加しませんか。あなたも何か企画を持ってきませんか。

「——待てないプロジェクト」のメンバー1人1人は小さな存在です。しかしこのグループに参加することで必ず何かができるのです。「——待てないプロジェクト」は今後も多様な活動を通じてボランティア間の交流を深め、かつ広げていくつもりです。ボランティア活動を少しでも市民の間に広げること、日本社会の重い扉を押し開けていこうということです。同時に私たち自身の見聞、知識を広め、活動力を強め、自己を変革していくのです。

専従の人たちだけのボランティア活動なんてつまらないではありませんか。ましてT/Eを読んでいるだけでは面白くありません。私たちの活動を社会に広げ、市民として活動を続けていきましょう。

最後にお願ひです。どうか読者の皆さん、ご意見を下さい。「——待てないプロジェクト」に参加して下さい。私たちは喜んで待っています。また、私達とは別に、第2、第3の「始まるまで待てないプロジェクト」が生まれることも望んでいます。

See You Again !

JVCプロジェクト

1987年 2月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	<p>渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。</p> <p>機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。</p> <p>JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3土曜日 午後1時～4時 学習会 第4月曜日 午後6時～9時</p>	全国社会福祉協議会	<p>岩崎駿介（代表） 星野昌子（事務局長） 柴田久史、佐々木志保、 加納 妙、前川昌代、 佐久間典子、古西 勇、 鶴田三芳、岩崎美佐子、 富安光子、村田恵子 他</p>
日本国内	<p>●日本語家庭教師</p> <p>プロジェクトも3年経ち、日本語家庭教師だけの内容から、生活相談、医療・法律相談など多岐にわたるようになった。定住難民との関係も、援助する側される側という関係ではなく、共に生きる関係としてとらえ直すことからプロジェクト名の変更を考えている。また奉仕というイメージの強いボランティアという名称の廃止、活動内容の検討を行っている。</p> <p>2月8日、神奈川県秦野市で起きたカンブチア人一家殺害事件をきっかけに、この裁判との関わりを通して定住難民問題を考え直す会の発足の動きがある。機関誌『そんぽっと』を発行中。</p>	<p>ジャパン・タイムズ 神奈川県福祉部 国際婦人福祉協会</p>	<p>森山久寿子、 他約60人</p>
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドール郡)	<p>●農業による自立促進/定住</p> <p>マガネイ・キャンプ内にナーサリー（育苗床）を建設。今後はキャンプ内での植林を強化する。</p> <p>UNIT 5のメイン・チャンネル（主水路）建設はほぼ完了し、チャンネル沿いに植林を始めた。</p> <p>UNIT 6（ハルバ）にポンプを設置。農地の獲得から建設・運営にいたる各過程を、すべて難民自身が主体的に行うグループ・ファームिंगがよいよ本格的に始まる。</p> <p>またマグドール地区のフィーディングセンターをRHUとの話し合いのもとに撤去する。</p>	<p>UNHCR R.I. ジャパン 創価学会文化・ 平和運動事務局 ジャパン・タイムズ</p>	<p>嶋 紀晶、浜野敏子、 シアード 荻ノ迫善六、樫田秀樹、 法橋 亮、船川秀夫、 五十嵐裕昌、マーシャ石 井、モハメッド、ラシッ ド、ハジ、アオキ、アブ ディ・ジョフ、フセイン、 アハメッド、ハッサン</p>
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	<p>難民の生活レベルの向上をめざし、多角的な見地からプログラムを進行中。</p> <p>●医療・保健/補助給食</p> <p>日本人主体の活動からRHN（ソマリア政府の医療機関）中心に切り換え、ソマリア人による救援という体制を強化している。</p> <p>●植林</p> <p>乾季の水不足の中、コンパウンド内と他の2カ所の苗木は順調に育っている。</p> <p>●教育</p> <p>IIT（ソマリア政府の教育機関）の協力を得、生徒、教師の選出を行っている。</p> <p>●インカム・ジェネレイティング（難民が現金を得るためのプロジェクト）</p> <p>1月から始まったパン屋プロジェクトは順調に活動しており、働いている難民はJVCから独立できる見通しである。</p> <p>●家庭菜園</p> <p>水不足ではあるが野菜は順調に育っている。農業の指導と合わせて小規模な料理教室も行っている。</p>	<p>朝日新聞厚生文化事業団 モラロジーMIRC 仏国土をつくる う会 砂漠に種をまく 人の会</p>	<p>米澤 聡、中路美和子、 庄司 美、シュクリ、 ハッサン、アブディ、 シュイク・アブディ</p>

JVCプロジェクト

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
<p>エチオピア (ウォロ州)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●総合的復興促進 マーシャに深井戸を2基掘る作業が、現地政府の機関の協力のもとに開始された。料理、家庭菜園の指導を含んだ栄養教室も、低体重児を持つ家庭を中心に行われている。 種子銀行は来季に向かって準備中。モデル農場ではアグロフォレストリー用の樹種の育成実験と現地農法での農業を実施している。 ●植林 ツルテ川上流に100haの水土保全用植林地が認められ、これと家庭植林用のために苗木生産中。 ●農業 先月にひきつづき、種子銀行では現地での種子準備をしている。モデル農場ではアグロフォレストリー、有機農業、牧草実験等を行っている。 ●保健・栄養 第1回目の母子教室が終了。2回目は対象者を代えて始める予定。家庭訪問による家庭菜園の奨励も行っている。 ●給水 マーシャ村クリニック横の深井戸が完成した。 	<p>CRDA, 西本願寺, チャリティ・カレンダー, チャリティ・サイクル, メリノール修道士会, 全老連, バンド・エイド, 日本漫画家協会</p>	<p>内山田 康, 伊藤達男, 伊藤幸子, 久田信一郎, 有本敦子, イエットベルク, ソロモン, パレタ, フェテルワルク, ダニエル</p>
<p>カンブチア (プノンペン カンダール省 プレイベン省 スバイリエン省)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●カンブチアの人々への総合的人道援助 建築中の救援のためのワークショップ/技術学校は4月初めにセレモニーを予定している。 11月中にユニセフ・プノンペンと補助栄養給食プログラムにおける協力を合意。87年度には人材(医療・栄養)を派遣する予定。 プノンペン市に芝刈り機, ゴミ箱用の資材を提供。 OXFAMと共同で井戸掘りも行っている。 1. 救援のためのワークショップ/技術学校 2月中に建築完了。4月2-9日開校予定。 各支援団体の訪問を申請中。 2. 井戸掘り/給水 プレイベン州で継続中(OXFAMと共同) 3. ブレック・ピノウ孤児院援助 男子用宿舎, 手工芸室, 浴室の補修・建設完成。 トンレ・サップ川からの水浄化システムを計画中。 4. 補助栄養給食 1987年度からUNICEFと共同で栄養不良の子どもたちを対象に行う。人材も派遣する予定。 5. プノンペン市公衆衛生局への協力 同局のクリーンナップ・キャンペーンに協力し, 芝刈り機, ゴミ箱用の資材を提供した。 6. クメール古典舞踊学校支援 今年度計画のため申請待ち。 	<p>日本青年会議所 関東地区協議会 平和基金, 全国老人クラブ連合会, 創価学会文化平和運動事務局, モラロジーMIRC, 立正佼成会, 自動車労連, 庭野平和財団</p>	<p>熊岡路矢, 簗田健一</p>

急募! ……総会を手伝って下さい

☆第5回会員総会(6月上旬の開催予定)を意義深いものにするため, “総会企画グループ”を臨時に設けます。興味のある方はJVC事務局(担当:佐々木)までご一報下さい。

「参加したいが, ちょっと遠くて」という方はご意見, ご提案を是非。なお活動期間は4月から6月までの3カ月間です。

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ バンコク事務所	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報、バザー、古本のセール、季刊『ニュース・レター』（英語・タイ語）発行。	全国社会福祉協議会	ボンピモン・チャイブーン、カモン・ミンムアン、クリッサダ・タウイパサ 石原淑子、他約10人
カオイタン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 2月中に226人が第3国定住のためにキャンプを離れ、総人口は2月末で2万1,932人となった。2月9日、タイ軍最高司令部はイリーガル(未登録難民)を3月以降北部国境のSite Bへ移すことを発表。UNHCRもキャンプの縮小と公共施設の統廃合計画を発表した。こうした動きに現プロジェクトでどのような対応が可能か大事な時期にさしかかっている。	UNHCR R.I. ジャパン	矢野和貴、谷山博史、ソムヨット・ラタナタム、パイトゥーン・チマチュイ
国境のサイト2、 ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食 妊婦、三歳未満の幼児及び病院の患者、計4,797人にドライバックを、栄養不良児と結核患者計446人にはクックドフードを配給している。 あわせて妊産婦に対しての栄養・衛生教育を行っている。1月26日に砲弾が飛来して以来、安全状況はよくない。ひき続き警戒が必要である。	WFP/UNBRO	テリース、ブーム、トンチャイ、スリペン、ソムボン、スピチャ、エンドリアン、ソムサック
バナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション ・日本定住予定者 ①日本語学習の基礎(読み、書き、聞き取り) ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ・日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深める。 ●子供レクリエーション・プログラム 一般生活常識を通して自然科学の基礎を教える。	天理教千葉	浜崎妙子、大場きみよ アナン・ブッタミリンパティ 落合正幸、ウィパ・ロンブル
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 スラム在住児童が小学校(6年間)を卒業できるよう援助している。本年度の対象者は10のスラムで16校250人。 ●クロントイ図書館 クロントイスラム住民の就学前児童から成人までを対象としている。12区における新図書館建設のため、NHA(住宅公社)と交渉中。 ●移動図書 ラプレー、ナンシーのスラムで子供向け図書を中心に回覧。 ●移動学習センター(プラティープ財団、FFSC、JSRCとの共同プロジェクト) 9のスラムで学習の機会のない子供たちのため人形劇などで教育を行っている。 ●再定住 ラッカバン地区において再定住したバンコク市内のスラムの人たちへの資材援助(長期資金貸与方式)。	モラロジーMIRC、 NTV、JOFIC 庭野平和財団 京都国際青年委員 会	ヴェラナート・チュンクン、 サムルエイ・ジョンヨー クラン、アルニー・スニ ット・ムンナイ、リーラ ・クンナロン、スワン・ リンサムペン、コメイ ン・スンサマラ 佐藤正喜
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (PFAC, パラワン島)	●国際移民委員会(ICM)―第三国定住手続きにともなう医療業務及びキャンプ内でのプライマリ・ヘルスケア。	城西病院	青井千恵

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・报告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC 東京事務所
 (住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (2月小計 415,546円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. インドシナ難民救援募金 (2月小計 64,500円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- C. カンプチア募金 (2月小計 32,000円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- D. クロントイ・スラム募金 (2月小計 5,000円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
- E. デッグ・スラム奨学金・基金(2月小計 363,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- F. 日本語家庭教師募金 (2月小計 12,000円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- G. 医療募金 (2月小計 0円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
- H. ボランティア募金 (2月小計 0円) 現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
- I. JVC運営経費募金 (2月小計 200,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. 無指定募金 (2月小計 615,589円)

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
 東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)
 加入者名—JVC 東京事務所

編集後記

▶ソマリアはJVCの現場でも最も自然条件が厳しい。寒暖の差が激しい半砂漠の気候は、温帯で20数年間も暮らした者にはこたえる。おまけにイスラム文化とのカルチャーショック。自分自身との格闘の末にようやくソマリア全体を受け入れる余裕が生まれ、今では誰もが「また行きたい」と言う。

▶“難民救援”などという甘い言葉だけでソマリアに暮らすことはできない。過酷な状況をくぐりぬけてきただけあって、“ソマリア帰り”は人間がひとまわり大きくなったように見える。「ムムッ、オヌシやるな」。しなやかになって帰ってくる彼らに驚かされる今日このごろでもある。



昭和62年3月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
 〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
 ☎03(834)2388 Telex:2323187 JVCHQ J

バンコク事務所 JVC THAILAND
 29/3 Soi Saengchan, Sukhumvit40,
 Rama 4 Road, Bangkok 10110.
 ☎391-1117

Telex:87032 COMSERV TH

ソマリア事務所 JVC SOMALIA
 c/o UNHCR P.O. Box 2925
 Magadishu,
 Telex:794 HICOMREF SM

エチオピア JVC ETHIOPIA
 事務所 P.O. Box 6941 Addis Ababa

カンブチア JVC KAMPUCHEA
 事務所 203 Monorom Hotel Phnom Penh
 Letter :c/o ICRC, P.O. Box 11-1492
 Bangkok.

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共300円